

ローカルテレビ局の放送理念確立に向けた取り組み

－ 東海テレビ「セシウム事件」再生活動から－ (2014)

Efforts to broadcast philosophy establishment of local TV station Tokai TV from "cesium incident" restoration activities (2014)

磯野 正典
Masafumi ISONO

金城学院大学国際情報学部 KINJOGAKUIN University college of global and media studies

要旨・・・2011年8月に起きた東海テレビの不適切なテロップ送出問題を対象に、ローカルテレビ局の放送倫理確立に向けた取り組みについて、背景分析と社内で実施されている再生活動を中心に分析考察した。
キーワード・・・放送理念・ローカルテレビ・テレビの公共的役割・地域情報・放送基準

1. はじめに

2011年8月にフジテレビ系列中京広域圏の東海テレビ制作「ぴ〜かんテレビ」に於いて、不適切なテロップが放送され、社会全体から多くの批判に晒された。これは放送理念・倫理の在り方、テレビの公共的役割に関わる問題として、マスメディアが持つ本質的役割、また、それに関わる放送事業者の使命を具体的に考え、実現するための方策を模索するまたとないケーススタディーの機会となった。放送理念や倫理の確立に向けた再生活動を推し進めるには、どのような方法があるのか、また、どんなやり方で実現できるのか。本研究は「放送の理念・倫理」といった漠然とした概念の構築や、実現のための事例研究を行い、メディアの本質的役割の検証となる「ローカルテレビ局の放送理念確立に向けた取り組み」を分析考察したものである。

2. 研究方法

事件の発生当初から経営者と幹部社員の対応や発言を内部から観察・記録した。また、社員のこの事件に対する反応や意見をヒアリング調査した。また、事件発生後2年半に渡り事件の背景と事実関係を継続的に解明した。その他、東海テレビの再生に向けた事業者としての取り組みと、それに対する内部の評価や意見について状況分析を重ねた。また、再生への取り組みとして組織された再生委員会やオンブズマンの活動、社内の再発防止に向けた取り組みについては、対外発表された資料を補足。さらに、系列局の社員と同じ中京広域圏のテレビ局社員の意見をヒアリングして、内外双方からの視点でテーマについてアプローチした。

3. 結論

基幹メディアとしての「放送理念」に対する捉え方、その実現に向けた取り組みは非常に重要である。そこに至る諸問題が、1年目は再生委員会による取り組みでは改善していなかった事が明らかとなった。その証拠として2012年には同社制作の2つのドラマ「赤い糸の女」と「幸せの時間」で不適切な演出がなされ、これに対してBPOが『公共性の欠如・視聴率第一主義・製作者の惰性』『基準を逸脱した表現は、視聴者を愚弄している危険性がある』と、再度の放送倫理や公共性に抵触する指摘を東海テレビに対して行なった。この問題の原因解明を行うことで、同社に蔓延している過剰な演出手法や話題性作りのための番組ブームアップ、更にはそれらの延長上に存在するビジネス展開の実態についても明らかになることが出来、事件発生時から暫くの間は、この事件に対する認識が正しくなされていないことが垣間見えた。しかし、二回目の問題の発生を発端に現場制作者を中心とした社員の中に、事の重大性と具体的な対応策に対する前向きな意見が寄せられるなど、改善に向けた自助努力の芽が出始めていることを捉えることができた。特にコンプライアンス推進局が中心となって進めている一連の活動に、今後の成果がかかっていると見える状況が形成されつつあることがわかった。

研究発表では、本件に関する資料を提示し、また、東海テレビの社内報に掲載された最新資料も紹介しつつ、より実証的な発表を行なう。

参考資料：社報とうかい・341 2014年10月 東海テレビ放送株式会社 総務部